



森田草平年表

明治14（1881）年

3月19日、岐阜県稲葉郡の農家に長男として誕生。本名、米松。

明治24（1891）年 10歳

5月、父を失い家督相続をした。

明治28（1895）年 14歳

4月、軍人を志望し、上京して海軍予備校に入学。

明治32（1899）年 18歳

3月、日本中学校卒業。7月、第四高等学校に入学。

詩「母の願ひ」、『文庫』、2月。

明治33（1900）年 19歳

5月、上京。7月、第一高等学校に入学。

「隣の児」、『文庫』、12月。

明治34（1901）年 20歳

同級生の生田長江らと同人誌『夕づつ』創刊。

詩「蘇生」、『文庫』、1月。

明治35（1902）年 21歳

与謝野夫妻を訪ね、鉄幹から「花雲珠」の名をもらい『夕づつ』改題。平田秃平、馬場孤蝶を知り、大陸文学への眼が開かれた。

明治36（1903）年 22歳

9月、「サッフォー」に影響された「仮寝姿」が『文芸倶楽部』の一等に入選。7月、一高卒業。9月、帝国大学文科英文学科入学。

詩「朝」、『文庫』、1月。

「犬吠崎」、『明星』、3月。

「恋の曲者」、『文芸倶楽部』、4月。

「地震」、『明星』、4月。

「われは人妻」、『文庫』、6月。

「仮寝姿」、『文章倶楽部』、7月。

明治37（1904）年 23歳

「死児」、『明星』、11月。

「しゃくんたら姫」、『時代思潮』、9～10月。

「白日夢」、『明星』、11月。

#### 明治38（1905）年 24歳

11月、駒込千駄木の夏目漱石を訪ね、門下生の一人となる。この年、『芸苑』（後に『芸文』）に長江、栗原古城らと同人になった。

「遺骨」、『明星』、1月。

「捨てられたる女」、『帝国大学』、6月。

シエンキーイツチ「騎士」訳、『時事新報』、9～10月。

#### 明治39（1906）年 25歳

7月、帝国大学文科英文学科卒業。

「病葉」、『芸苑』、1月。

「新年の小説」、『芸苑』、2月。

「『破戒』を読む」、『芸苑』、5月。

「新刊評」、『芸苑』、8月。

「『草枕』を読む」、『芸苑』、10月。

「芸苑雑俎 其一」、『芸苑』、11月。

#### 明治40（1907）年 26歳

4月、漱石、松浦一の世話で天台宗中学に英語教師となる。6月、文学講座の講師となる。聴講生に平塚らいてう、山川菊栄らがいた。

「啞者の恋」、『家庭文芸』、2月。

『銷沈』、服部書店、11月。

#### 明治41（1908）年 27歳

1月、らいてうより、回覧雑誌に書いた「愛の末日」という短篇を見せらせ、書簡を通して二人の仲が急速に発展。ダヌンツィオの「死の勝利」に影響され、3月21日、塩原尾花峠に情死行に企てた。追手によって連れ戻されて後、漱石によって庇護された。世に言う「煤煙事件」。

「批評家の批評」、『新潮』、3月。

「新年物と文士 森田白揚」、『国民新聞』、11月13日。

「脚色論に関して抱月氏に与ふ」、『国民新聞』、11月28日。

「小説予告 煤煙」、『東京朝日新聞』、12月4日。

#### 明治42（1909）年 28歳

11月25日、漱石主宰で『朝日新聞』に「朝日文芸欄」が設けられ、農隆とともに編集にあたった。

「煤煙」、『東京朝日新聞』、1月1日～5月16日。  
「文士と酒、煙草」、『国民新聞』、1月9日。  
「文士と芝居」、『国民新聞』、1月13日。  
「お富お君お若」、『国民新聞』、1月26日。  
「文士とすし、汁粉」、『国民新聞』、2月18日。  
「作中に現れたる女性 巢林子、漱石、風葉」、『女子文壇』、4月。  
「「煤煙」を書きつゝある心持」、『秀才文壇』、4月。  
「「煤煙」に於ける知識と愛情」、『新潮』、6月。  
「『三四郎』」、『国民新聞』、6月10～13日。  
「落果 『煤煙』について」、『新小説』、7月。  
「ポシビリテイの文学」、『国民新聞』、7月15～16日。  
「離合」、『中央公論』、8月。  
「水死」、『女子文壇』、8月15日。  
「ハムレットとリチャード二世」、『国民新聞』、8月20～21日。  
「扉」、『新小説』、10～11月。  
「『続俳諧師』と『妻』」、『国民新聞』、10月7～10日。  
「先づ文学をして社会を動すだけの力あるものとせよ」、『新潮』、11月。  
「母」、『新潮』、11月。  
「「刺戟に生きんとする文芸」に就いて小宮豊隆君に応ふ」、『ホトトギス』、11月。  
「俳優無用論」、『東京朝日新聞』、12月1日。  
「新聞雑誌こゝかしこ」、『東京朝日新聞』、12月11～12日。

#### 明治43（1910）年 29歳

田村俊子をいち早く評価し、文壇に押し出す。

「正月の新聞雑誌」、『東京朝日新聞』、1月11～14日。  
「如何にして生きんか」、『東京朝日新聞』、2月9日。  
『煤煙 第一巻』、金葉堂・如山堂、2月。  
「二月の文壇」、『東京朝日新聞』、2月16～19日。  
「自然主義者の用意」、『東京朝日新聞』、3月9日。  
「四月尽」、『中央公論』、5月。  
「『牧師の家』」、『東京朝日新聞』、5月8日。  
「翻訳物」、『東京朝日新聞』、5月10日。  
「文壇近時」、『東京朝日新聞』、5月24日。  
「「冷笑」を読む」、『東京朝日新聞』、7月11日。  
「さつま汁」、『東京朝日新聞』、7月12日。  
「近時の傾向」、『東京朝日新聞』、7月15～17日。  
「「あそび」について」、『東京朝日新聞』、8月10日。

「翻訳文から受けた感化 翻訳物と私の文章」、『文章世界』、8月15日。

『煤煙 第二巻』、金葉堂・如山堂、8月。

「ヒュマニテイの文学」、『東京朝日新聞』、9月3日。

「九月の小説」、『東京朝日新聞』、9月7～9日。

「九月の戯曲」、『東京朝日新聞』、9月10日。

「うらおもて」、『東京朝日新聞』、10月10日。

「十月の小説」、『東京朝日新聞』、10月11日。

「十月の小説」、『東京朝日新聞』、10月13日。

「吾等成青年の行くべき道」、『文章世界』、11月15日。

「十一月の戯曲」、『東京朝日新聞』、11月21日。

「杜翁逝く」、『東京朝日新聞』、11月23日。

「杜翁の小説」、『東京朝日新聞』、11月27日。

「十二月の小説」、『東京朝日新聞』、12月22～23日。

#### 明治44（1911）年 30歳

「役者本位の芝居も面白い」、『演芸画報』、1月。

「半日」（小品文）、『学生文芸』、1月。

「狂言」、『中央公論』、1月。

「吾等は新しきものゝ味方なり」、『東京朝日新聞』、1月3日。

「一月の戯曲」、『東京朝日新聞』、1月25～26日。

「思想と現実の力」、『東京朝日新聞』、1月29日。

「朝霧の罩めた村」、『新叙景文範』、新潮社、2月。

「事実と想像と」、『東京朝日新聞』、2月7～8日。

「二月の戯曲」、『東京朝日新聞』、2月17日。

「帝国座の脚本「頼朝」」、『東京朝日新聞』、2月24～25日。

「脚本募集について一帝劇の人々へ」、『東京朝日新聞』、3月1日。

「再び事実と想像と」、『東京朝日新聞』、3月14日。

「縷」、『影と声』、春陽堂、3月。

「小説予告 自叙伝」、『東京朝日新聞』、3月25日。

「尾濃」、『新潮』、4月。

「御殿女中」、『ホトトギス』、4月。

「自叙伝」、『東京朝日新聞』、4月27日～7月31日。

「選ばれたる作家」、『秀才文壇』、5月。

「短歌の為の生れた人」、『女子文壇』、5月。

「我が好む演劇と音楽」、『女子文壇』、5月。

『トビラ』、佐久良書房、5月。

「誌友会席上に於て」、『女子文壇』、6月。

「文芸委員会の真価如何 芸術に協力なし」、『中央公論』、6月。  
「ハウとホワツト」、『新潮』、7月。  
「文章の中の外国語」、『文章世界』、7月。  
「序文」、田村俊子『あきらめ』、金尾文淵堂、7月。  
「八月の小説と戯曲（其一）（其二）」、『東京朝日新聞』、8月9～10日。  
「八月の小説と戯曲（其三）（其四）」、『東京朝日新聞』、8月14～15日。  
「人生の素人一「泥人形」の世評について一」、『東京朝日新聞』、8月27日。  
「小説の中に描かれたる東京の自然」、『新潮』、9月。  
「皮肉と反語」、『東京朝日新聞』、9月4日。  
「「懲」を読んで」、『東京朝日新聞』、9月10日。  
「二たび人生の素人」、『東京朝日新聞』、9月29日。  
「未練」、『新小説』、10月。  
「大塩平八郎」、『東京朝日新聞』、10月3日。  
「芸の芸術と一新舞踊劇の事一」、『演芸画報』、12月。  
「「芸」と「芸術」」、『秀才文壇』、12月。  
「初恋」、『中央公論』、12月。  
『自叙伝』、春陽堂、12月。

#### 大正1（1912）年 31歳

創作から翻訳へと力を移し始める。

「女優と女形との価値 其一 女子は教ふ可からず」、『演芸画報』、1月。  
「踊」、『歌舞伎』、1月。  
「恋愛の後」、『新小説』、1月。  
「イブセンの女性 附、女優論」、『読売新聞』、1月7日。  
「女性の鞭 附、女流作家」、『読売新聞』、1月21日。  
「二たびイブセンの女性」、『読売新聞』、1月28日。  
「『懲』の批評」、『新潮』、2月。  
「世の中に生きて居ない女」、『新婦人』、2月。  
「留守の間」、『文章世界』、2月。  
「個人的興味」、『読売新聞』、2月18日。  
「「お絹」と「夜雨集」」、『読売新聞』、2月25日。  
「駆落」、『中央公論』、3月。  
「個人的興味」、『雄弁』、3月。  
「「自叙伝」に就いて（上）」、『読売新聞』、3月17日。  
「「自叙伝」に就いて（中）」、『読売新聞』、3月24日。  
「「自叙伝」に就いて（下の一）」、『読売新聞』、3月31日。  
「名取弟子」、『女子文壇』、4月1日。

「やまと」、『新潮』、4月。  
「「自叙伝」に就いて（下の二、完）」、『読売新聞』、4月7日。  
「晩春雑感」、『秀才文壇』、5月。  
「それでは手紙の様なもの」、『ホトトギス』、5月。  
「自由劇場評」、『読売新聞』、5月5日。  
「車の音」、『読売新聞』、5月26日。  
「好きな俳優の好きな芸 幸四郎一羽左衛門一菊五郎一宗之助」、『演芸画報』、6月。  
「エロチツクな肉の感じと崇高な宗教的気分―「死の勝利」と「或ひは然らむ或ひは又然らざらむ」―」、『新潮』、6月。  
「博徒の群―問題小説の試作―」、『太陽』、6月。  
「私は最終の日に参ります」、『ホトトギス』、6月。  
「文芸に現はれたる好きな女と嫌ひな女（七二）」、『読売新聞』、6月6日。  
「十字街」『読売新聞』、6月7～8月28日。  
「しほ子」、『中央公論』、7月。  
「御殿女中」、『自然と人生 現代傑作美文日記文』、柏原奎文堂、7月。  
「新著四種 田山花袋氏の『朝』」、『文章世界』、9月。  
「製作の後」、『読売新聞』、9月8日。  
『現代文芸叢書第十五編 初恋』、春陽堂、9月。  
「近き未来に於ける我邦の文学」、『読売新聞』、9月22日。  
「小狗」、『文章世界』、10月。  
「偶感数則」、『秀才文壇』、11月。  
イブセン「鴨」訳、『新小説』、11～12月。  
「「鴨」の翻訳所感」、『読売新聞』、11月3日。  
「木曾の旅」、『読売新聞』、11月24日。  
「一葉女史論 其三」、『女子文壇』、12月1日。  
「作家としてのいろいろな感想（一）」、『読売新聞』、12月。  
『十字街』、春陽堂、12月。

## 大正2（1913）年 32歳

五月ごろ、森田たまと素木しづとが森田のもとに入門。安香ハナ（後のつね夫人）との交際が始まる。

「三代目小六」、『太陽』、1月。  
「女の一生」、『文章世界』、1月。  
「昨年の芸術界に於いて（一）」、『読売新聞』、1月1日。  
「序」、生田長江訳『死の勝利』、新潮社、1月。  
「作家としてのいろいろな感想」、『読売新聞』、1月5日。  
「お伽噺改善論」、『読売新聞』、1月9～11日。

「新しい意味の理想主義のために」、『読売新聞』、1月12日。  
「お重」、『大阪毎日新聞』、1月19日。  
「情実の弊」、『演芸画報』、2月。  
「岡崎日記」、『新小説』、2月。  
「野鴨の女主人公と日本のイブセン劇」、『大正演芸』、2月。  
「む、む、む!」、『読売新聞』、2月13～14日。  
イブセン『鴨』訳、新潮社、2月。  
「日本の舞踊」、『読売新聞』、2月20～22日。  
「田村とし子論 新らしき女としての女史」、『新潮』、3月。  
「一体われ等は如何したら可い?」、『読売新聞』、3月25日。  
「尾濃の女性」、『新小説』、4月。  
「妾」、『新潮』、4月。  
「袈裟御前」、『中央公論』、4月。  
「小説「選者」」、『読売新聞』、4月6日。  
「長良の夢」、『一人一景』、応来社、4月。  
「女の良人」、『太陽』、5月。  
「作者の嘆」、『読売新聞』、5月11日。  
「吾声会の「鴨」(一～三)」、『読売新聞』、5月15～17日。  
『女の一生』、春陽堂、5月。  
「吾声会の「鴨」(四)」、『読売新聞』、5月20日。  
「鴨の上演に就て」、『秀才文壇』、6月。  
「狂犬」、『中央公論』、6月。  
「たは言」、『読売新聞』、6月29日。  
「追跡」、『新世紀』、7月。  
「自家弁護の意義」、『新潮』、7月。  
「拳銃」、『読売新聞』、7月6日。  
「高浜虚子宛書簡」、『ホトトギス』、7月。  
「「殻」」、『読売新聞』、7月27日。  
「起請文」、『文章世界』、8月。  
『煤煙』第三巻、如山堂、8月。  
「女」、『読売新聞』、8月24日。  
「踊」、『新小説』、9月。  
「文壇の良心」、『文章世界』、9月。  
「食客」、『ホトトギス』、9月。  
「靴」、『文章世界』、10月。  
「松葉杖をつく女 小引」、『新小説』、11月。  
「誤訳指摘問題」、『新潮』、11月。



「誰」、『帝国文学』、11月。

「小説の中の女性」、『文章世界』、11月。

『煤煙』第四巻、新潮社、11月。

メレヂュコウスキー「霊肉問題と死の恐怖」訳、『第三帝国』、12月10日。

大正3（1914）年 33歳

6月、長江と雑誌『反響』を植竹書院から発刊。五号まで編集に参加。

「母と娘」、『新小説』、1月。

「林檎畑」、『新世紀』、1月。

「女」、『新潮』、1月。

『踊』、浜口書店、1月。

「特別創作選評 小説選評について」、『処女』、2月。

「発作」、『文章世界』、2月。

メレヂュコウスキー『人及び芸術家としてのトルストイ 並にドストエフスキー』訳（+安倍能成訳）、玄黄社、2月。

「下手人」、『中央公論』、3月。

「最近の感想」、『読売新聞』、3月29日。

ドストイエフスキー『永久の良人』訳、国民文庫刊行会、3月。

ボツカシオ『十日物語』訳、国民文庫刊行会、3月。

「大地震の日まで」、『太陽』、4月。

「上京当時の回想 附処女作当時」、『文章世界』、4月。

「水死」、『現代文芸傑作集』、三省堂、4月。

「中島清氏訳『サアニン』を読んで」、『反響』、4月。

「増富平蔵氏訳『イフィゲニエ』」、『反響』、4月。

「漱石山房座談 一」、『反響』、4月。

「消息」、『反響』、4月。

「西洋文学講話第一編南欧・第二編北欧第二章独逸・第三章スカンチナビア」、『新文学百科精講前編』、新潮社、4月。

「四月の小説」、『読売新聞』、4月21～22日。

『縮刷 煤煙 全』、植竹書院、4月。

「文士の生活 森田草平」、『大阪朝日新聞』、5月3日。

『名家短編叢書第三編 車の音』、忠誠堂出版部、5月。

「下画」、『反響』、6月。

「編輯ののち」、『反響』、6月。

「『毒薬を飲む女』」、『時事新報』、6月9～11日。

「夏季の愛読書」、『時事新報』、7月7日。

「『炮烙の刑』について青鞥記者にあたふ」、『反響』、7月。

「編輯の後」、『反響』、7月。

イブセン『鴨』訳、青年学芸社、7月。

「下画」、『反響』、8月。

「編輯の後」、『反響』、8月。

ドオデー『サッフオー』訳、青年学芸社、8月。

「岡崎より」、『反響』、9月。

「編輯の後」、『反響』、9月。

「二百十日前」、『文章世界』、10月。

ハウプトマン『寂しき人々』訳、青年学芸社、10月。

『戯曲シヤクンタラ姫』、日月社、10月。

『父と母と娘 現代百科文庫 文芸思想叢書第一篇』、植竹書院内日月社、10月。

『踊』、植竹書院、10月。

ダンテ『神曲』訳、日月社、10月。

「共鳴ある評論壇の人々」、『新潮』、11月。

「本年創作界に活躍せし人々（五）名士の私かに洩せし創作及創作家評」、『時事新報』、11月10日。

シエンキウイツ『軍事小説 祖国の為に』訳、博文館、11月。

『未練』、鈴木三重吉方、12月。

ダナンチオ『快樂児』訳、博文館、12月。

大正4（1915）年 34歳

「具体的問題の具体的解決」、『反響』、1月。

「『現代と婦人の生活』中自分に関する一節について」、『反響』、1月。

「編輯ののち」、『反響』、1月。

「ドストイェフスキの一面」、『読売新聞』、1月30日。

「一月の創作壇」、『新潮』、2月。

「具体的問題の具体的解決」、『反響』、2月。

ゲーテ『ファスト』訳、日月社、2月。

メレヂユコウスキー「霊肉問題と死の問題」訳、『第三帝国の思想』、益進会、2月。

「一人ぼち」、『新公論』、3月。

「ドストイェフスキの描いた怖ろしき事実」、『新潮』、3月。

ドストイェフスキ「決闘」訳、『新公論』、4月。

ボツカシオ「黄金の盃に盛つた男の心臓」訳、『新日本』、4月。

ドストイェフスキ『カラマゾフの兄弟』訳、日月社、4月。

「妻の帰宅」、『新公論』、5月。

「時事雑感」、『新公論』、5月。

「馬場孤蝶宛書簡」、『新公論』5月。

『自叙伝（縮刷）』、日月社、5月。  
「新しい女の二典型」、『文章世界』、6月。  
「一日の生活記録一五月八日と云ふ日一」、『文章世界』、6月。  
「夫婦と妾と三人情死・姦婦の首斬り」、『新公論』、7月。  
「新刊評論 お菊さん」、『新公論』、7月。  
「稲田詣で」、『新公論』、7月。  
「道草」、『新小説』、7～8月。  
「根柢まで」、『文章世界』、7月。  
「「悪霊」の序」、『読売新聞』、7月18日。  
ドストイェフスキイ『悪霊』訳、国民文庫刊行会、7月。  
『現代名作集第十八編 初恋』、鈴木三重吉方、7月。  
「囊」、『新小説』、9月。  
ボツカシオ「心臓の糞一十日物語の一節一」、『新公論』、9月。  
「道德の権威」、『太陽』、9月。  
「岩野泡鳴氏夫妻の別居に対する文壇諸家の根本的批判 普通の貞操問題の逆」、『新潮』、10月。  
「名誉心と虚栄心」、『新潮』、10月。  
「産婦」、『文章世界』、10月。

#### 大正5（1916）年 35歳

「不感的痴呆状態」、『新日本』、1月。  
「ゴゴリ」、『新潮』、2月。  
「孤独を求めて」、『文芸雑誌』、4月。  
「菌」、『新小説』、5月。  
「器用性な素木しづ子」、『新潮』、5月。  
「焼跡に立ちて」、『太陽』、5月。  
「物質上より見たる文学者の生活」、『文芸雑誌』、5月。  
「学生時代」、『文芸雑誌』、5月。  
「朝霧に罩められた村」、『作法作例叙景文』、博文館、5月。  
「虚栄の女」、『大阪朝日新聞』、5月17日～8月24日。  
「感想の感想」、『時事新報』、5月。  
「バイロンとドストエフスキー」、『新潮』、6月。  
「如何にタゴールを観る乎 彼の作品の紹介と来朝」、『新潮』、7月。  
「自覚せざる偉大」、『ピアトリス』、7月。  
「次号小説予告 長編小説名人気質」、『婦人公論』、7月。  
「濡れ髪」、『翻訳の仕方と名家翻訳振』、実業之日本社、7月。  
「冤罪と「闇の力」」、『新小説』、8月。

「タアニング・ポイントに立つて居る自分」、『新潮』、8月。  
「捨児」、『婦人公論』、8月～大正6年2月。  
「「煤煙」物語」、『文章倶楽部』、8月。  
「『闇の力』」、『新潮』、9月。  
「結論よりもプロセス」、『トルストイ研究』、9月。  
「少年時代」、『文芸雑誌』、9月。  
「処女」、『ピアトリス』、9月。  
「日本のをどり」、『邦楽』、9月。  
「片山博士の賤業婦救済意見を読む」、『新小説』、10月。  
「文学に志す青年の座右銘」、『文芸雑誌』、10月。  
「独身主義」、『文章世界』、10月。  
「煤煙を書いた前後」、『大阪朝日新聞』、10月2日。  
「当来の文芸としての人道主義」、『新潮』、11月。  
「翻訳」、『文芸雑誌』、11月。  
「翻訳撰後の所感」、『文芸雑誌』、11月。  
「論理の尖鋭と洞察力と」、『文章世界』、11月。  
『虚栄の女』、春陽堂、11月。  
「捨犬」、『新小説』、12月。  
「洞観」、『新潮』、12月。  
「不死身の女」、『新日本』、12月。  
「日記の中から」、『帝国文学』、12月。  
「トルストイの芸術的方面—其の片鱗について—」、『トルストイ研究』、12月。  
「新井薬師」、『文章倶楽部』、12月。  
「「私を捨てて天に則れ」是が漱石氏の主義だつた」、『東京日日新聞』、12月10日。  
「臨終の模様」、『都新聞』、12月10日。  
「徹底的な先生の人生観」、『読売新聞』、12月10日。

大正6（1917）年 36歳

「人道主義」をめぐる和辻哲郎と論争する。漱石の遺作「明暗」の校正に従事し、『漱石全集』の編集、校正に専念した。

「ト翁の肉の洞観」、『新潮』、1月。  
「漱石先生と門下」、『太陽』、1月。  
「反魂香」、『太陽』、1月。  
「夏目漱石氏の一生 幼年と青年時代」、『新小説』、1月。  
「漱石先生の思出」、『文章世界』、2月。  
ゴオゴリ『死せる魂』上巻訳、国民文庫刊行会、2月。  
「プロットの是非」、『新潮』、3月。

「漱石先生を憶心」、『浅草文庫』、4月。  
「通俗小説失敗の経験」、『中央文学』、4月。  
「初恋二つ三つ」、『婦人公論』、4月。  
「理想主義的自然主義—自然派並びに人道派の人々の一読を求む—」、『文章世界』、4月。  
ダナンチヨ『犠牲』訳、国民文庫刊行会、4月。  
「文壇鳥瞰 プロットの是非」、『処女文壇』、5月。  
「田村俊子氏の印象 技巧と性質と並び到る」、『新潮』、5月。  
「露西亞の自然主義」、『新潮』、5月。  
「現代作家の著書とその代表作」、『青年文壇』、5月。  
「文壇諸家立志の動機 初め海軍軍人を志望」、『文章倶楽部』、5月。  
「森田草平氏来書」、『文章倶楽部』、5月。  
『捨子』、白水社、5月。  
「嫉妬」、『処女文壇』、6月。  
「我が言はむとするところ—和辻哲郎、田山花袋氏に一—」、『新小説』、6月。  
ゴオゴリ『死せる魂』下巻訳、国民文庫刊行会、6月。  
「漱石先生の原稿」、『明治大正の文学早わかり』、新潮社、6月。  
「描写と体験」、『新潮』、7月。  
「尾花峠」、『ポケット紀行文粹』、新潮社、7月。  
「推移の跡、体験の意義、小説でない小説を求む」、『文章世界』、8月。  
「作品の材料」、『新潮』、9月。  
「好きな文章」、『文章倶楽部』、9月。  
「漱石先生の『文学論』について」、『文章世界』、9月。  
「新秋の創作を読む」、『時事新報』、9月4～11日。  
「新技巧論」、『新潮』、10月。  
「『クローム・イエロウ』」、『世界文学月報第二期30』、新潮社、10月。  
「想ひ出すまゝに」、『新小説』、12月。

大正7（1918）年 37歳

「大工の徳の話」、『珊瑚礁』、1月。  
「生田長江君の作物と広津和郎氏のそれと 一」、『時事新報』、1月1日。  
「新夫婦」、『新家庭』、1月。  
「漱石氏の芸術観」、『新潮』、1月。  
「予の二十歳頃 大将にならうと」、『中学世界』、1月。  
「十三号室」、『帝国大学』、1～2月。  
「贅沢を追ふ心」、『婦人公論』、1月。  
「生田長江君の作物と広津和郎氏のそれと 二～三」、『時事新報』、1月4～5日。  
「生田長江君の作物と広津和郎氏のそれと 四～九」、『時事新報』、1月8～13日。

「富の勢力と文芸」、『新潮』、2月。  
「日記より」、『珊瑚礁』、3月。  
「漱石先生と校正」、『新潮』、3月。  
「素木しづ子の追懐」、『文章世界』、3月。  
「序」、素木しづ子『青白き夢』、新潮社、3月。  
生田長江+森田草平編『新文学辞典』、新潮社、3月。  
「「気が指す」といふこと」、『新小説』、4月。  
「貧乏と作家」、『新潮』、4月。  
「日記」、『新潮』、4月。  
「美術家の妻」、『婦人公論』、4月。  
「日記」、『新潮』、4月。  
「美術家の妻」、『婦人公論』、4月。  
「作家があつてのイズム」、『新潮』、5月。  
「燈籠流し」、『日日作例俳句と文章』、日本書院、5月。  
「上演された「濁り江」」、『時事新報』、6月15日。  
『訳註ファスト』、森田+東新訳、文武堂書店、7月。  
「文壇昔話 「一葉会」の開かれるまで」、『読売新聞』、7月16日。  
「今日は小説の批評を」、『文壇名家書簡集』、新潮社、7月。  
「鼻き>源兵衛」、『赤い鳥』、9月。

大正8（1919）年 38歳

「醜い顔」、『婦人公論』、1月。  
「比翼塚問題是非」、『新小説』、2月。  
「後ろを向いて書く作者」、『新潮』、2月。  
「お恒の方」、『赤い鳥』、3～5月。  
「紅芙蓉」、『女学世界』、3～大正9年4月。  
「『吾輩は猫である』は果して風刺物乎」、『新潮』、4月。  
「文豪夏目漱石—漱石先生と私—」、『中央文学』、7月。  
「「陳子へ」の批判」、有島生馬『鏡中影』、春陽堂、8月。  
「所謂有識無産階級と労働問題」、『新潮』、9月。  
「読者としての言分」、『新潮』、9月。  
「舟は流れる」、『淑女画報』、10月。  
「二者のいづれに属するか」、『新潮』、10月。  
カンフィールド『大戦と女』、弘道館、11月。  
『文章道と漱石先生』、春陽堂、11月。  
「足許を見よ—再び有識無産階級の立場—」、『新潮』、12月。

大正9（1920）年 39歳

3月、法政大学文科新設に伴い、野上豊一郎に招かれて英文学教授に就任。

大正10（1921）年 40歳

「『冥途』其他」、『読売新聞』、1月24～26日。

「のんき者と王様」、『赤い鳥』、7～8月。

『近代文芸十二講』、新潮社、8月。

「文芸院設立の是非と希望」、『新潮』、11月。

「フェミニズム」、『文芸旬報』、11月。

大正11（1922）年 41歳

1月21日、母とく死去。

「女と童貞」、『新愛知』、1月3日。

「現代の劇作家と作品」、『新演芸』、7月。

「沢村宗之助の舞台顔」、『演芸画報』、9月。

「女性解放の問題」、『女性』、10月。

「『瀕死の白鳥』と『鷺の都』一露国舞踊と日本の踊との価値批判一」、『女性』、12月。

大正12（1923）年 42歳

「漫語五章」、『新愛知』、1月1日。

「家康と勝海舟」、『新愛知』、1月1日。

「猿曳の子」、『令女界』、1月。

トルストイ『アンナカレニナ』訳、三徳社・岡村書店、3月。

「鉄箒 欺かれた」、『東京朝日新聞』、8月23日。

「輪廻」、『女性』、10～大正14年12月。

大正13（1924）年 43歳

「原稿罹災の記」、『女性』、1月。

「家庭に於ける漱石先生」、『女性改造』、5月。

「人間」、『女性改造』、5月。

「近ごろの女 私はかう見る」、『報知新聞』、6月21日。

「文芸講座 小説作法講話」、『女性改造』、7～11月。

「一幕物の主題」、『演劇新潮』、8月。

「旅行笑話」、『女性』、8月。

「その頃の話 「煤煙」時代の思ひ出」、『サンデー毎日』、8月17～24日。

「御返事一木村毅氏へ」、『国民新聞』、8月28日。

「鼠のお葬ひ」、『赤い鳥』、9月。

「夏目漱石作品の装釘」、『図書館雑誌』、9月。

「野上弥生子論 その印象二つ三つ」、『女性改造』、10月。

「個性の発見」、『令女界』、12月。

#### 大正14（1925）年 44歳

3月より国民文庫刊行会に入り、従来発表してきた翻訳を整理する。

「妻と子」、『婦人公論』、1月。

「私のペンネーム」、『東京』、2月。

「紫煙問答」、『郊外』、3月5日。

「久米正雄宛書簡 大正五年三月十三日」、『文芸春秋』、4月。

「翻訳の話」、『読売新聞』、4月25～28日。

ゲーテ『ウイヘルム・マイステル』上巻訳、国民文庫刊行会、6月。

「読書界出版界 訳者の言葉 レーン訳から『千一夜物語』を訳して」、『読売新聞』、9月7～8日。

レーン『千一夜物語』第一巻訳、国民文庫刊行会、9月。

『輪廻』、『近代日本文芸読本2』、興文社、11月。

「擱筆の辞」、『女性』、12月。

「文芸の創作に関して水平社同人諸君に御相談」、『文芸春秋』、12月。

#### 昭和1（1926）年 45歳

「大正十五年の文壇及び劇壇に就て語る」、『新潮』、1月。

「不同調の濫觴」、『不同調』、1月。

「批評家としての生田長江君」、『読売新聞』、1月1日。

『輪廻』、新潮社、1月。

「劇作術と『平将門』その他」、『新潮』、2月。

「個人主義的傾向」、『文章倶楽部』、2月。

「『輪廻』雑感」、『文章倶楽部』、2月。

「事実無根—中村星湖氏へ」、『都新聞』、3月5～7日。

レーン『千一夜物語』第二巻訳、国民文庫刊行会、3月。

「読者諸君の前に」、『都新聞』、3月24～25日。

「劇の書ける男と書けない男」、『新潮』、4月。

「その頃のこと（2）古き写真に就ひての思ひ出 志望変更」、『文章倶楽部』、4月。

「底を割る」、『都新聞』、4月13～15日。

ゲーテ『ウイヘルム・マイステル 附 親和力』下巻訳、国民文庫刊行会、4月。

「日記帳から」、『文芸春秋』、5月。

「現文壇に対する一考察」、『新潮』、6月。

「笑ひとその人間」、『不同調』、6月。



「はがき評論 片上伸氏」、『不同調』、6月。

「私の代表作は如何にして書かれたるか 当時の新文学『煤煙』」、『文章倶楽部』、6月。

「正しきを正しきとせよお一菊池寛氏に答ふ」、『新潮』、7月。

「見物を動かすには?」、『演劇改造』、8月。

「清貧と大衆文芸」、『新潮』、9月。

「最近文壇の収穫(7)(8)最近に読んだもの」、『都新聞』、9月7~8日。

「漱石先生原稿」、『明治大正文学の輪郭』、新潮社、9月。

レーン『千一夜物語』第三巻訳、国民文庫刊行会、9月。

トルストイ『アンナ・カレニナ』訳、生方書房、9月。

「東北の印象」、『随筆』、10月。

「大慈寺と原氏の別墅」、『不同調』、10月。

『全訳クリスマス・カロル』、尚文堂、10月。

「旅から帰つた朝」、『現代文評釈』、紅玉堂書店、10月。

「単行本と雑誌=文壇近時=」、『大阪毎日新聞』、10月22日。

「馬どろぼう」、『赤い鳥』、11月。

「文士の原稿料問題」、『大阪毎日新聞』、11月30日。

昭和2(1927)年 46歳

「L' ELEVE DIPLOMEE」、『LE JARDIN DES PIVOINES』、AU SANS PAREIL、PARIS、1月。

「墓を発く話」、『近代風景』、2月。

「『デカメロン』の翻訳に就て—『世界文学全集』の為に—」、『読売新聞』、2月12~13日。

「大学の生活は汽車旅行だつた ラテン語に苦しんだ頃」、『帝国大学新聞』、2月28日。

「早春雑感」、『文芸道』、3月。

「海外名作の印象 『サツフォ』の思ひ出」、『文章倶楽部』、3月。

「『タイス』の主人公と『煤煙』のそれ」、『報知新聞』、4月19~20日。

デュマ・フィス『椿姫・タイス』、国民文庫刊行会、5月。

「社会時評」、『新潮』、6月。

「自然主義時代に演ぜられた『朝日文芸欄』の役目」、『早稲田文学』、6月。

「漱石先生の人と芸術」、『改造社文学月報6』、改造社、6月。

「別世界の話」、『都新聞』、6月25~26日。

「夏が来た!」、『週刊朝日』、7月3日。

「文豪夏目漱石—漱石先生と私—」、『春陽堂月報3』、春陽堂、8月。

「醍醐味」、『報知新聞』、8月29~30日。

「ありのすさび」、『不同調』、9月。

『アラビヤ夜話 日本児童文庫28』訳、アルス、9月。

「解題」、『明治大正文学全集27』、春陽堂、9月。

「感想 徳川時代百姓一揆叢談を読む」、『新潮』、10月。

「「煤煙」に於ける想像と事実」、『春陽堂月報5』、春陽堂、10月。

セルバンテス『ドン・キホーテ』上巻訳、国民文庫刊行会、10月。

「友人の酒癖を戒むる文」、『実習文章構成修辭法』、長光堂出版部、11月。

「『坊ちやん』の芝居」、『東京朝日新聞』、11月9～10日。

「「輪廻」雑感」、『春陽堂月報6』、春陽堂、11月。

『明治大正文学全集第廿九巻 森田草平篇』、春陽堂、11月。

昭和3（1928）年 47歳

3月、盲腸炎を患う。

「夏目漱石」、『近世名人達人大文豪』、大日本雄弁会講談社、1月。

「私の見たる漱石先生」、『太陽』、2月。

「『虞美人草』のこと」、『漱石全集月報1』、岩波書店内漱石全集刊行会、3月。

レーン『千一夜物語』第四巻訳、国民文庫刊行会、4月。

「『坑夫』」、『漱石全集月報2』、岩波書店内漱石全集刊行会、4月。

「始めて経験する天地地異の感じ 『死の勝利』を読んだ時の感じ」、『世界文学月報13』、新潮社、4月。

イブセン『鴨』訳、『近代劇全集1』、第一書房、5月。

「『サフォ』の思ひ出」、『世界文学月報15』、新潮社、6月。

「『レ・ミゼラブル』以上の興味多き傑作」、『世界文学月報18』、新潮社、9月。

セルヴァンテス『ドン・キホーテ』下巻訳、国民文庫刊行会、9月。

「夏目漱石研究」、『日本文学講座19』、新潮社、9月。

「『デカメロン』に就て」、『世界文学月報19』、新潮社、10月。

「『三四郎』の思出」、『漱石全集月報10』、岩波書店内漱石全集刊行会、12月。

昭和4（1929）年 48歳

「新年の力作（一）牛山ホテル」、『時事新報』、1月1日。

「吉良家の人々」、『東京朝日新聞』、4月16～6月25日。

「雅号考その他」、『文芸春秋』、6月。

「自己反省の閃めき一文学作物以上 寺田寅彦氏の「万華鏡」を読む」、『帝国大学新聞』、6月10日。

「四十八人目」、『改造』、10月。

「他を許す文学と許さざる文学」、『東京朝日新聞』、12月15～19日。

レーン『千一夜完訳アラビヤナイト』全十二巻訳、中央公論社、12～昭和5年12月。

昭和5（1930）年 49歳

2月に行なわれた第17回総選挙に立候補した堺枯川のために、応援演説をする。

「千一夜物語」、『報知新聞』、1月25日。

「森田草平訳千一夜物語—アラビヤン・ナイト—」、『報知新聞』、1月30日。

『世界大衆文学全集第五十一巻 十字軍の騎士』訳、改造社、3月。

「名原氏訳の「二都物語」」、『世界大衆文学全集26』、改造社、4月。

『吉良家の人々・四十八人目』、改造社、4月。

「文芸時評—五月の雑誌」、『東京朝日新聞』、5月5～9日。

「原作と模倣作」、『報知新聞』、5月20～22日。

『森田草平集』、改造社、6月。

「劇評 焦点のある劇とない劇—帝劇の『坊ちやん』夏目漱石原作—」、『演芸画報』、8月。

「評壇に於ける私の経験」、『読売新聞』、8月23～29日。

「夏目漱石先生を憶ふ言葉 ない腕」、『読売新聞』、10月26日。

#### 昭和6（1931）年 50歳

『世界大衆文学全集第五十八巻 千一夜物語』訳、改造社、1月。

「就職世相」、『東京朝日新聞』、1月31～2月5日。

「餅つき」、『赤い鳥』、5月。

「鄭成功の母」、『文芸春秋オール読物号』、5月。

「井原西鶴に就いて」、『作品』、5月。

「僕の帽子」、『法政大学新聞』、6月20日。

「国語問題放題」、『冬柏』、8月。

「女弟子」、『婦人公論』、9～11月。

「僕の性に合ふもの合はぬもの—ゴルスワージーの「駆落者」とジヨイスの「ユーリシーズ」—」、『古東多万』、9月5日。

「ジャーナリズムを敵に回して」、『古東多万』、9月5日。

「解説」、『第二期世界文学全集6』、新潮社、9月。

ハックスレイ「クローム・イエロー」訳、『第二期世界文学全集6』、新潮社、9月。

「軽いお話」、『東京朝日新聞』、10月1～4日。

「思ふがまゝに」、『東京朝日新聞』、10月29～11月1日。

「大野九郎兵衛の娘」、『文芸春秋オール読物号』、11月。

「僕の顔」、『婦人公論』、11月。

「モデルにされる者の悩み」、『大阪朝日新聞』、11月10～13日。

「田圃の太夫」、『婦人公論』、12月。

#### 昭和7（1932）年 51歳

「脚色上の模範」、『英文学誌』、1月。

「舞台の上の反語」、『古東多万』、1月。

「芝居の中での偶然」、『文芸春秋』、1月。

「思ふがまゝに」、『年刊小説』、厚生閣書店、1月。

ヂョイス『ユシリーズ』第一巻訳、岩波文庫、2月。

「舞台の上の反語」、『法政大学新聞』、2月18日。

「道三の死」、『中央公論』、3月。

ヂョイス『ユシリーズ』第二巻訳、岩波文庫、4月。

「夏目漱石研究」、『日本文学講座13』、新潮社、4月。

「ULYSSES—James Joyce—」訳註、『新英米文学』、5～6月。

「英語教師の心得書」、『新英米文学』、5月。

「晩春雑話」、『読売新聞』、5月20～22日。

「ボッカチオ小伝」、『世界文学講座南欧文学篇』、新潮社、5月。

「明治時代の文豪とその生活を語る」、『新潮』、6月。

「ゲーテをめぐる女性」、『婦人世界』、6月。

「二つの相似たる脚色」、『新英米文学』、7月。

「初夏漫談」、『文芸春秋』、7月。

「近頃会心の作—“The Good Companions”を紹介す—」、『英文学誌』、7月。

「夏目漱石」、『俳句講座5』、改造社、7月。

ヂョイス『ユシリーズ』第三巻訳、岩波文庫、8月。

「文芸時評（一）プロ文学に一言 民衆は英雄を喜ぶ」、『東京朝日新聞』、8月28日。

「文芸時評（二）『無名の英雄』プロ作品を読んで」、『東京朝日新聞』、8月29日。

「文芸時評（三）軟派の文芸 芸術派の作品を読む」、『東京朝日新聞』、8月30日。

「文芸時評（四）デカメロンの一横光氏の「母」を読む」、『東京朝日新聞』、8月31日。

「六文人の横顔」、『文芸春秋』、9月。

『日本の小説文庫144 吉良家の人々』、春陽堂、9月。

「ULYSSES—James Joyce—」訳註、『新英米文学』、10～11月。

「大倉さんの家出」、『日本国民』、10月。

「母校とは何ぞや」、『法政大学新聞』、10月22日。

「類型と個性」、『女性時代』、11月。

「翻訳の話」、『新英米文学』、11月。

「のんびりした話」、『中央公論』、11月。

「六佳仙傘の内—有名婦人の横顔—」、『婦人サロン』、11月。

「ユリシーズについて（一）暴露の書『ユリシーズ』」、『帝国大学新聞』、11月21日。

「ULYSSESについて 音楽的な技巧（2）」、『帝国大学新聞』、11月28日。

「肯綮に中らざる野球評判記」、『鉄塔』、12月。

ヂョイス『ユリシーズ』第四巻訳、岩波文庫、12月。

「ULYSSESについて 作者ヂョイスの意図と文献（3）」、『帝国大学新聞』、12月5日。

9月、漱石門下であった法政大教授の野上豊一郎と衝突し、翌年辞職することになる法政大学騒動が起こる。

「伊藤左千夫を怒らした話」、『アララギ』、1月。

「のんびりしない話」、『経済往来』、1月。

「無駄な金」、『渋柿』、1月。

「私の見たゴールズワージー」、『新英米文学』、1月。

「天才の認識の門—チヨイスによつて発表されたシェクスピアとその妻との関係」、『新潮』、1月。

「愚妻論」、『中央公論』、1月。

「トルストイの片影 彼の作品と生活を通じて」、『婦人公論』、1月。

「政治的文学について」、『新潮』、2月。

「ドストエーフスキ」、『岩波講座世界文学』、岩波書店、2月。

「懸賞小説に寄せて(8) 既成作家の奮起を」、『東京朝日新聞』、2月7日。

「玄人と素人」、『大阪朝日新聞』、2月8日。

「貧乏物語」、『週刊朝日』、4月。

「師弟の情誼」、『文芸春秋』、4月。

「婦人解放運動は何処へ行つた?」、『若草』、4月。

「作家と境遇—漱石とドストエーフスキー」、『帝国大学新聞』、4月10日。

「作家と境遇—読書も亦体験の一部である—」、『帝国大学新聞』、4月17日。

「教授は官学出 まだ固まらぬ私学の将来」、『報知新聞』、5月4日。

『のんびりした話』、大畑書店、5月。

「座談会 逸話の堺利彦」、『中央公論』、6月。

「千一夜物語」、『岩波講座世界文学』、岩波書店、6月。

「『英文学散策』」、『東京朝日新聞』、6月16日。

「鱒」、『経済往来』、7月。

「男侠元祖 大鳥逸平」、『中央公論』、8月。

「やきもちの話」、『経済往来』、10月。

「万座温泉行」、『渋柿』、10月～昭和9年1月。

「無題録」、『文化集団』、11月。

「幸福なる志士」、『モダン日本』、11月。

「訳の理論と実際」、『英語英文学講座6』、英語英文学講座刊行会、11月。

「文学一般論」、『新文芸思想講座2』、文芸春秋社、11月。

「抗議」、『新大衆文芸』、11月。

「文学一般論」、『新文芸思想講座3』、文芸春秋社、12月。

「漱石先生と私」、『新英米文学』、12月。

8月、法政大学騒動により法政大学を退職。

「作者としての曾我廼家五郎」、『東京朝日新聞』、1月6日。

「ストック押売り 歌舞伎座の九時間」、『東京朝日新聞』、1月7日。

「野上君こそ策動 僕は心外だ」、『東京朝日新聞』、1月7日。

「途方に暮れた水谷八重子」、『東京朝日新聞』、1月8日。

「むづかしい芝居 東劇の左団次」、『東京朝日新聞』、1月10日。

「初めて築地へ アット・ホームの感じ」、『東京朝日新聞』、1月11日。

「『西遊記』が見もの 若手の新歌舞伎座」、『東京朝日新聞』、1月12日。

「赤門派と『帝国大学』」、『日本文学講座11』、改造社、1月17日。

「変な辞令」、『週刊朝日』、1月21日。

「私の関与した事実だけを」、『中央公論』、2月1日。

「文学一般論」、『新文芸思想講座5』、文芸春秋社、2月。

「法政騒動の張本人は誰か」、『文芸春秋』、3月。

「文学一般論」、『新文芸思想講座6』、文芸春秋社、3月。

「漱石先生とフォルスタッフ」、『沙翁復興』、4月。

「第二の結婚」、『婦人公論』、6月。

「文学一般論」、『新文芸思想講座9』、文芸春秋社、6月。

「お気に入りでしたら」、『書翰文大集成』、一元社、6月。

「此儀嚴重に」、『書翰文大集成』、一元社、6月。

「女流作家 その一 ジェーン・アウステン」、『女性時代』、7月。

「文学一般論」、『新文芸思想講座10』、文芸春秋社、7月。

「一夫一婦論」、『時事新報』、7月26～27日。

「真実のこと」、『女性時代』、8月。

「チャールズ・ディッケンズの『デエヴィッド・カッパフィールド』」、『英語英文学講座8』、英語英文学講座刊行会、8月。

「変装したる国王」、『東京朝日新聞』、8月12～15日。

「騙される者の幸福」、『経済往来』、9月。

「家庭の女王」、『女性時代』、9月。

「ディッケンズ作『二都物語』」、『英語英文学講座7』、9月22日。

「叔母と姪」、『法政大学』、11月。

「噂は飛ぶ」、『大阪朝日新聞』、11月10～14日。

「私の学生時代の回顧」、『上級英語』、11月。

「女流作家—その二 シャーロット・ブロンテ」、『女性時代』、12月。

「歳晩無感」、『婦人公論』、12月。

昭和10(1935)年 54歳

「嘘と誇張」、『帝国大学新聞』、1月1日。

『のんびりした話 普及版』、国文館、1月。  
「一高時代回顧」、『橄欖樹』、2月。  
「信長の死」、『改造』、3月。  
「日本女性列伝 列婦秀林院夫人一細川忠興の妻」、『婦人公論』、3月。  
「樽柿」、『モダン日本』、3月。  
「推薦図書館」、『モダン日本』、3月。  
「文芸時評（1）生田氏の谷崎論」、『東京朝日新聞』、5月1日。  
「大学検討座談会」、『文芸春秋』、5月。  
「文芸時評（2）プロ派の作品」、『東京朝日新聞』、5月2日。  
「文芸時評（3）身辺小説の興味」、『東京朝日新聞』、5月3日。  
「文芸時評（4）陰鬱な作品」、『東京朝日新聞』、5月4日。  
「文芸時評（5）大衆文芸を拾ふ」、『東京朝日新聞』、5月5日。  
「思ひつくまゝに」、『読売新聞』、5月21～24日。  
「光秀の死と秀吉」、『経済往来』、7月。  
「のんきな話」、『大阪朝日新聞』、7月14日。  
「向陵の想出」、『中央公論』、8月。  
「森鷗外先生」、『女学生読本』、10月。  
ヂョイス『ユリシーズ』第五巻訳、岩波文庫、10月。  
「最も完備したる全集」、『思想』、11月。  
「唐人髷」、『令女界』、11月。

#### 昭和11（1936）年 55歳

「人を褒める」、『東京朝日新聞』、1月1～4日。  
「『綴方読本』」、『東京朝日新聞』、1月5日。  
「野球放談」、『満州日日新聞』、1月7～10日。  
「長江君逝く」、『都新聞』、1月13～14日。  
「結婚難世相」、『時事新報』、1月15～17日。  
「寺田さんの最初の印象」、『渋柿』、2月。  
「愚妻論」、『昭和随筆集1』、日本学芸社、2月。  
「田能村竹田」、『現代』、3月。  
「最後の印象」、『思想』、3月。  
「娘を持った両親への注文」、『婦人画報』、3月。  
「敵を褒める」、『雄弁』、3月。  
「演劇随想 「勸進帳」の主役」、『都新聞』、3月20～22日。  
「所謂大衆に受けるもの」、『文芸春秋』、4月。  
「煙草の想出」、『専売協会誌』、4月。  
「女房を売った男」、『富士』、4月15日。

「芝居の中の偶然」、『随筆読本』、三笠書房、5月。  
「若い者とロマンス」、『生田長江全集月報7』、大東出版社、5月。  
「お恥づかしい話」、『漱石全集月報7』、岩波書店内漱石全集刊行会、5月。  
「一日の放楽」、『文芸』、6月。  
『のんびりした話 保存版』、国文館、6月。  
「思ひつくまゝに」、『読売新聞』、6月21～23日。  
「生来の文学者一鈴木三重吉君逝く一」、『東京朝日新聞』、6月28日。  
「三重吉よ心配するな」、『大阪朝日新聞』、6月30日。  
「看客と聴衆」、『東宝』、7月。  
「劇評 国宝もの 河合、喜多村の芸者」、『読売新聞』、7月9日。  
「劇評 迷惑な出し物一歌舞伎座の盆興行一」、『読売新聞』、7月11日。  
「芝居の無理一新国劇の追善興行一」、『読売新聞』、7月14日。  
「伝統を護る人々 第一劇場の東西若手合同劇」、『読売新聞』、7月15日。  
「劇評 脚本の撰択 ばらばらの有楽座」、『読売新聞』、7月16日。  
「奇才鈴木三重吉君」、『文芸通信』8月。  
「舞台中継 四十八人目」、『婦女界』、9月。  
「秋窓漫筆」、『都新聞』、9月8～10日。  
「兄弟」、『赤い鳥』、10月。  
「処女作時代の三重吉」、『赤い鳥』、10月。  
「名誉心のいろいろ」、『雄弁』、10月。  
「生死を賭けて」、『文壇大家花形の自叙伝』、大日本雄弁講談社、10月。  
「姉なればこそ」、『富士』、10月15日。  
「『敵はない』と思つた人」、『現代』、11月。  
「田山さんを憶ふ」、『花袋全集4』、花袋全集刊行会、12月。  
「道中見たまゝ」、『東京朝日新聞』、12月21～24日。

昭和12（1937）年 56歳

「意地の両面」、『現代』、1月。  
「松山と熊本巡礼記（上）」、『漱石全集月報15』、岩波書店内漱石全集刊行会、1月。  
「問はず語り」、『石楠』、2月。  
「小西増太郎氏著「トルストイを語る」」、『東京朝日新聞』、2月15日。  
『一日の放楽』、人文書院、3月。  
「文壇の聳棧敷から」、『東京朝日新聞』、3月12～15日。  
「松山座談会」、『漱石全集月報17』、岩波書店内漱石全集刊行会、3月。  
「パパさんママさんはもう古い」、『令女界』、4月。  
「和製英語」、『現代』、5月。  
「「日本的」なもの」、『日本評論』、6月。



「良人の子」、『富士』、6月15日。  
「鼻きゝ源兵衛」、『児童文学読本五年上』、中行館書房、7月。  
「鑑定」、『帝国大学新聞』、8月9日。  
「新我楽多文庫⑮夏の鹿野山」、『東京朝日新聞』、8月15日。  
「小引」、夏目漱石『虞美人草』、春陽堂、9月。  
「死人の花嫁」、『週刊朝日』、10月。  
「江戸城大会議 蘇峰先生に質す」、『革新』、10月19日。  
「死よりも強し」、『富士』、11月。  
「「坊ちやん」と松山」、『帝国大学新聞』、11月8日。  
「寺田さんと「鷺娘）」、『科学ペン』、12月。

#### 昭和13（1938）年 57歳

「日本人の勇氣と面子」、『改造』、1月。  
「探偵小説 深夜の百貨店」、『オール読物』、2月。  
「名射撃手」、『現代』、2月。  
「脚色上のシチュエーションと鬪びき」、『読書随筆』、矢の倉書店、3月。  
「日本事始め物語」、『現代』、5月。  
「高物価を如何に乗り切るか」、『文芸時代』、5月。  
「文芸時評（1）専門化の法則 「杜鵑」と「花冷え」の情調」、『東京朝日新聞』、5月27日。  
「文芸時評（2）読者受けと作者 振はない『改造』の諸作品」、『東京朝日新聞』、5月28日。  
「文芸時評（3）創作の情熱 職業化傾向の強い作家」、『東京朝日新聞』、5月29日。  
「文芸時評（4）俗事の魅力 共感そゝる「湯たんぼ雀）」、『東京朝日新聞』、5月31日。  
「文芸時評（5）明るい農村 伊藤永之助氏の朗作「鷺）」、『東京朝日新聞』、6月1日。  
「落第」、『早稲田大学新聞』、6月15日。  
「夏目漱石を取巻く人々」、『月刊文章』、7月。  
「小宮豊隆氏著『夏目漱石』を読む」、『都新聞』、7月26日。  
「戦国町人魂」、『富士』、9月。  
「維新前後」、『革新』、9月19日。  
「股旅物に一言」、『東京朝日新聞』、9月27日。  
「尊王攘夷から自主的外交まで」、『文芸春秋』、10月。

#### 昭和14（1939）年 58歳

「軍国種々相一世相談義一」、『革新』、3月。  
「派閥日本一世相談義一」、『革新』、4月。  
「合言葉の流行一世相談義一」、『革新』、5月。  
「歌舞伎座印象記」、『東宝』、5月。  
「漱石山房のこと一処分問題に関する私案」、『東京日日新聞』、5月24～25日。

「跛行景気の種々相一世相談義一」、『革新』、6月。  
「人的資源の浪費一世相談義一」、『革新』、7月。  
「仮面を脱ぐ一世相談義一」、『革新』、8月。  
「波瀾よ、涙るな」、『読売新聞』、8月31日。  
「夏目漱石」、『新女苑』、9月。  
「健康か情実か」、『東京朝日新聞』、9月19日。  
「初秋漫語」、『学燈』、9月20日。  
「漱石の家」、『朗』、9月20日。  
「或老女の自殺―一つの人生記録―」、『中央公論』、10月。  
「洞ヶ峠と偽善」、『読売新聞』、10月3日。  
「二つの笑顔」、『博浪沙』、10月。  
「分らない話」、『詩と美術』、11月10日。  
「知らない話」、『詩と美術』、12月10日。  
「続知らない話」、『詩と美術』、12月30日。

#### 昭和15（1940）年 59歳

「良書紹介―はがき回答―」、『図書』、1月5日。  
「豊太閣の素描（其の一～其の八）」、『詩と美術』、1月10～9月10日。  
「読史余録」、『書齋』、3月。  
「天正時代の女性」、『新女苑』、3月。  
「三戸野行 細川ガラシャ夫人隠棲の地」、『読売新聞』、4月3～5日。  
「戦時経済下のわが家ではこんな風にしてゐる」、『真理』、5月。  
「わが郷土の産業 提灯 団扇 傘 岐阜」、『婦人公論』、5月。  
「求職」、『文芸道』、5月。  
「「高尾ざんげ」の背景」、『博浪沙』、7月5日。  
「馬場先生と一葉の旧宅」、『博浪沙』、7月23日。  
「勇怯切風艦」、『義士小説名作集』、博文館、8月。  
「馬場孤蝶先生」、『三田文学』、9月。  
「新一高校長・安倍さん」、『朝日新聞』、9月6日。  
「光秀謀叛の動機」、『詩と美術』、11月10～昭和16年1月25日。  
「着物」、『婦人と生活』、12月。

#### 昭和16（1941）年 60歳

「良書紹介―はがき回答―」、『図書』、1月5日。  
「私の若い頃」、『都新聞』、1月30～31日。  
「新春の短篇小説―文芸時評―」、『改造』、2月。  
「学生の娯楽と文学の尊重」、『都新聞』、2月18日。

「高柳光寿編輯“大日本戦史”」、『朝日新聞』、2月23日。

「豊太閣の素描（其の九～其の十二）」、『詩と美術』、2月25～8月1日。

「新劇に望むもの」、『都新聞』、4月3日。

「信長と角力」、『都新聞』、5月17～19日。

「対談会 漱石の思ひ出」、『新女苑』、6月。

『豊臣秀吉』第一巻、改造社、7月。

「秀吉の出現」、『知性』、8月。

「読史余録」、『書齋と読書』、三省堂、10月。

「蘭丸の兄」、『博浪沙』、12月5日。

昭和17（1942） 61歳

『豊臣秀吉』第二巻、改造社、3月。

「太閤秀吉一秀吉自身の「声」を聞く一」、『文芸』、4月。

「新しき希望」、『都新聞』、5月2日。

『夏目漱石』、甲鳥書林、9月。

昭和18（1943） 62歳

「平田秃木先生」、『英語青年』、6月。

「人と思想（30）夏目漱石 英文学者としての態度」、『三田新聞』、7月25日。

「武士と茶道」、『神戸商大新聞』、7月。

『吉良家の人々』、聖紀書房、9月。

「序引」、『秃木遺響文学界前後』、四方木書房、9月。

『続夏目漱石』、甲鳥書林、11月。

「情熱」、『東京新聞』、12月13日。

「平田秃木先生」、『平田秃木追憶』、平田春雄、12月。

昭和19（1944）年 63歳

「精神と物力 最後の勝利を制せん」、『東京新聞』、1月7日。

『青少年のために書かれた史談 豊臣秀吉』、成徳書院、6月。

「「寺子屋」変痴奇論」、『演劇界』、8月。

昭和20（1945）年 64歳

「貨幣化保有米」、『朝日新聞』、12月8日。

「政治への発言」、『東京新聞』、12月30日。

「時局漫想」、『新信州日報』、12月。

昭和21（1946）年 65歳

「私の知る安倍文相」、『東京新聞』、4月9～10日。  
「私の「共産主義」」、『改造』、5月。  
「僧房漫筆」、『文明』、5月。  
「夢声をノックアウトした話」、『週刊朝日』、5月26日。  
「いかさまの天下」、『創造』、7月。  
「女性の創作心理」、『芸苑』、9月。  
「飯田の播磨屋のバーズ少佐」、『劇場』、9月。  
「我が外国文学への道」、『東北文学』、10月。  
「著作権と所有権一二つの矛盾（上）一」、『東京新聞』、11月1日。  
「「家」と農民」、『文芸春秋』、11月。  
『漱石の文学』、東西出版社、12月。

#### 昭和22（1947）年 66歳

4月、共産党候補の林百郎のために応援演説を行う。  
「何処へ行く」、『中部日本新聞』、2月10日。  
「再び「何処へ行く」」、『中部日本新聞』、2月23日。  
「疎開者と家」、『朝日評論』、3月。  
「“真実を言った”」、『東京新聞』、3月19日。  
「田舎に棲みて一最初の“漱石全集”刊行を中心に一」、『書評』、5月。  
「文芸放談」、『東京新聞』、6月14～20日。  
「近頃飯田在の風景—お百姓の心理—」、『改造』、7月。  
「歌舞伎の若手達」、『東京新聞』、7月5～6日。  
「細川ガラシャの生涯」、『女性改造』、8月。  
「時代と“顔”」、『毎日新聞』、8月18日。  
「漱石商標問題」、『東京新聞』、8月31～9月2日。  
「解説」、『長塚節日本文学選』、光文社、9月。  
「「美談」のない敗戦」、『風報』、10月。  
『漱石先生と私』上巻、東西出版社、12月。

#### 昭和23（1948）年 67歳

5月、日本共産党に入党。  
「「森の石松」是非」、『東京新聞』、1月20日。  
『漱石先生と私』下巻、東西出版社、1月。  
「農村アナクロニズム」、『座談』、2月。  
「日本人の顔」、『毎日新聞』、4月26日。  
「柿のはなし 森田草平氏入党座談会①」、『アカハタ』、5月18日。  
「あんまさんの話 森田草平氏入党座談会②」、『アカハタ』、5月19日。

「息子たちの話 森田草平氏入党座談会③」、『アカハタ』、5月20日。

「顔」、『週刊朝日』、5月30日。

「そぞろ語」、『教育と文化』、5月。

「入党の心境」、『ニュース』、5月。

「浪曲の世界」、『青年文化』、7月。

『ガリバー旅行記』、広島図書、7月。

「お屋形と被官」、『アカハタ』、7月28～29日。

「共産党に入るの弁」、『前衛』、8月。

「藤村記」、『東京民報』、9月11～12日。

『私の共産主義』、新星社、9月。

「スイストと漱石」、『芸林閒歩』、10月。

「天皇退位説に因んで」、『文芸春秋』、11月。

「飯田の播磨屋とバーンズ少佐」、『芝居』、大河内書店、11月。

#### 昭和24（1949）年 68歳

9月、肝臓肥大、黄疸になり、12月14日、長岳寺にて逝去。

「コンミニスト雑感」、『アカハタ』、1月1日。

「文芸放談」、『世界評論』、1月。

「細川ガラシヤ夫人」、『日本評論』、1～10月。

「世代の差違か日本の差か」、『世界評論』、3月。

「共産党に入るの弁」、『自由の旗の下に』、三一書房、4月。

「私自身の体験から見て」、『憂国の人々訴う』、ナウカ社、8月。

「往時茫々わが五十年の交遊録一」、『日本評論』、12月。

## 森田草平年表

<http://p.booklog.jp/book/86595>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86595>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86595>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ